
ハニーアンドミルク

麦子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハニーアンドミルク

【Nコード】

N58720

【作者名】

麦子

【あらすじ】

就活中女と甘党男の何気ない一週間のお話。（番外編あります）

月曜日

最近夜になると、どこからか金木犀の甘い匂いと共に、不安定で下手くそなメロディーが聞こえてくるようになった。

意味もなくふらりと、散歩というものを久しぶりにしてみた。夕焼けの色が、仕事とはいえ一日中パソコン漬けになっていた目にじんわりとやさしい。

河川敷をのっそりと歩いていると、前方からものすごいスピードで走ってくる女を視界にとらえた。前のめりになり、長い黒髪を振り乱し、一心不乱にこちらに走ってくるさまはまるでいのししみたいである。

びゅん！と一瞬の風がうまれる。女が俺の横を通り過ぎたらしい。その直後「ぐえっ」という、カエルの鳴き声のような声と何かが倒れたような音がした。

おそろおそろ女の走り去っていった方向へ振り返ってみると、盛大にすっ転んだあのようなだった。地面にうつ伏せに倒れこんでいる女のスカートは破れていて、パンツが丸見えだった。（へえ、白か）：思わず呑気にその光景を眺めてしまう自分に喝をいれる。違うだろう、ここは紳士らしく「大丈夫ですか、怪我はないですか？」と倒れた彼女を気づかいつつ、そっと起こしてあげるべき場面であって、どこぞの中学生みたいに「やっつい、白じゃん」などと心の中でガッツポーズをとっていい場面ではない。恥を知れ自分！紳士になりきれ自分！

「あの、だ…」

「ああっ、もう！歩きにくい！」

紳士気取りの俺が声をかける前に、女は自分の力で華麗に立ち上がり、泥がついたヒールを思い切り川に向かって投げ捨てた。…俺の、伸ばしかけた右手がむなしい。

「夕日のぼっかやろー！！」

ベタベタな青春ドラマでもなかなか拝めない青春くさいセリフを叫びながら、ボロボロになったリクルートスーツを華麗に着こなしている彼女は裸足で駆け出していた。…白のパンツを堂々と見せつけながら。

「そういや、最近まともに大声で叫んでないかも」

そう思うと、ボロボロになりながら走って転んで立ち上がって恥ずかしげもなく大声を出していた彼女がとてもかっこよく感じられた。俺もあんな風にかむしゃらに生きてみたいものです。

世の中、まだまだ捨てたもんじゃねえなと夕日を見て黄昏ていた俺の数メートル先で、女が再び盛大にすっ転んでいたがあえて見ないフリをした。

火曜日（前書き）

火曜日、深夜のコンビニにてすれ違い。

火曜日

仕事帰りにふと甘いものが食べたくなったので、ふらりと深夜のコンビニに立ち寄ってみた。店内には俺とやる気がないバイトさんの二人きり。男と男。男と女だったらどんなにいいか。コンビニにそんな桃色の淡い期待を寄せてみてもため息しかでなかった。

生クリームたっぷりのプリン、ほどよいにがあまい味がくせになるエクレア、旬の栗をふんだんに使ったモンブラン、まるまる太ったシュークリーム。全部、かごの中に入れていく。何時間後は俺の腹の中に消えていく。最後までおいしくいただきますのでそんな嫌そうな顔をするでないスイーツたちよ。

「俺は根っからの辛党だ。甘い菓子など好かん」

と、あれほど甘いものを毛嫌いしていた親父が夜な夜な台所でホットケーキを焼いてこっそり食べていたことを知ったのは中学一年の春だった。親父の素直になれない丸まった背中を見て、俺は決めたのだ。

俺は何がなんでも素直に生きていくぜ、と。

「すみません」

心の中でかっこつけていたら、誰かの肩にぶつかった。いや正確に言えば、ぶつけられた。誘惑のスイーツから視線を上げるとまだ真新しいリクルートスーツを着た女の白い横顔が見えた。その横顔は

心なしか疲れ切っている。ぼさぼさの長い黒髪の毛先に、何故か百円均一の値札のシールがくっついていた。：本当に何故に。

リクルートスーツの女は店内をふらふらと2周してから、何ももたずにレジまで向かっていく。男と男と女。三角関係が成立する図式のコンビニに、女の声が響いた。

「とりあえず、あんまん以外の種類全部ください」

“とりあえず”の使い方がおかしい。女の有無を言わせぬ空気に圧倒されたのかバイト店員は焦りながらもせつせと、大量の肉まん、ピザまん、ぶたの角煮まん、新商品のスイーツポテトまん（俺もあとで買おう）をビニールの袋につめていく。

「遅い」

女から地獄の番人のような低い舌打ちが聞こえた。

バイト店員の目尻に涙がたまっているように見えたのは気のせいじゃない、だって、俺もなんか泣きそうなもの。

「お釣りはいりませんから」

ポケットからしわくちゃの一万円を取り出して震えるバイト店員の手のひらに無理矢理渡すと、リクルートスーツさんは湯気が出ている袋を両手にぶら下げてコンビニの自動ドアにがつんと肩をぶつけ

ながら、ふらりと立ち去っていった。取り残された涙目の男と男。

「なあ、最近の若い女の子ってあんなこわい子ばかりなの？」

「：いや、そんなことはないはずです。きっとあの人限定ですよ」
「ですよね」

おなじ恐怖を味わった男同士、妙な友情が芽生えた深夜のコンビニにて。

：26歳の俺は今夜も甘いスイーツと一夜を過ごすのだ。

今日も聞こえてきた下手くそメロディーは、いつもより雑音がひどく荒れた音符を響かせていた。

火曜日（後書き）

コンビニのデザートは見ていただけでお腹がいっぱいになる幸せをくれます。

水曜日（前書き）

自販機にて、またもやすれ違い。

水曜日

風邪を引いた。熱を計ってみると39度もあった。無性に人肌が恋しくなったが、悲しいかな、俺にはやさしく看病をしてくれる彼女はいない。仕方なくベッドの隅に横たわっていたぶさいくな顔した犬のだきまくらにしがみついた。嗚呼、むなしいムナシイ。

高熱のせいでまともに機能してくれないからだで俺は自分のためにねぎを刻んでうどんを作り、自分のために押し入れから分厚い毛布を取り出してベッドにうずくまる。こんなとき、りんごの皮を剥いてくれる家庭的な彼女がいたらいいのに。邪念を振り払うために俺はだきまくらに綿が出そうなほど抱きついた。ムナシクナンカナイヨ！

目が覚めると、外はもう真っ暗だった。床に落ちていた腕時計を見るとちようど8時を回ったところだ。毛布を頭から被ったままのそのそと冷蔵庫へ向かう。ひんやりとした冷蔵庫の中は空っぽだった。悲しすぎてくしゃみをしたら鼻水といっしょに涙も飛び出た。

夜風に乗って、金木犀のあまい香りが俺のからだを包み込む。毛玉のついただらんとしたスエットのまま、自宅の隣にあるアパートの前へふらふらと歩く。そこにぼつんとたっている自販機に用があるのだ。水分補給しないと干からびちまう、俺のからだだ。

「売り切れ…」

自販機の前には先客がいた。熱のせいで視界がぼやけているため、はっきりとは見えないが人のかたちをしている。声だけ聞くと、女らしかった。：思わず女らしき人の下半身を確認する。よかった、足はある。夜に現れる幽霊的な何かだったらどうしようかと思った。そうだな、こないちご柄のフアンシーなパジャマを着ているお嬢さんが幽霊なわけないよなあ。俺はこう見えて怖がり屋さんなんだ。

「なんで…」

そろりそろりと女のすぐそばまで歩いていくが、なにやらぶつぶつ言っている女は俺の存在に気付かない。人恋しいから気付いてほしいようなほしくないような複雑な気持ちである。

「なんで売り切れなんだよっ！」

うなだれていた顔をキッと上げて、女は自販機に向かって思い切り飛び蹴りをした。もう一度言おう。いちご柄パジャマのお嬢さんが何の罪もない無防備な自販機に蹴りを食らわせたのだ。熱がまたあがったような気がした。

「どうぞ」

「ど、どうも」

どうやら俺の存在には気付いていたらしく、女はすんなりと自販機から身を退いた。売り切れになっていく飲み物をさりげなく確認すると…コーラといちごみるくが売り切れだった。多分いちご柄の彼女のことだから、かわいらしいいちごみるくを飲みたかったのだろうなあ。

「コーラ…飲みたかった…」

コーラなのかよ。

俺の隣にいる女の印象がなかなかさだまらないが、気持ち切り替えて本来の目的である飲み物を買うことにする。手に握り締めていた生暖かくなった小銭を入れようとしたら、横からいきりと腕が伸びてきて先にお金を入れられた。もちろんここには俺といちご柄パジャマしかいないから犯人は分かっている。え、いじめ？
そして、女は迷うことなくホットレモンのボタンを押した。

「奢りです」

「え」

「ひとにやさしくされたいと思うときほど、ひとにやさしくしたくなるんです」

「は？」

「風邪のときはホッとレモンがいいですよ。ビタミンCも摂取できますし、からだを温めてくれます」

熱で朦朧とする俺の頭の上に器用にホットレモンを置いて、女はふ

らりとアパートに戻っていった。どうやら彼女は俺の家の隣さんだったらしい。

「…今度、コーラ奢ります」

偶然に会うことができればの話だけれど。

ホットレモンでからだも心もあたたくしてもらったその日の夜。聞こえてきたお馴染みの音痴なメロディーは、いつもよりなんだか細くて今にも消えてしまいそうだった。

水曜日（後書き）

あったかい飲み物が喉を通っていく感触が好きです。こころがぽわっとします。

木曜日（前書き）

月明かりの下、初接触。

木曜日

病み上がりなのに死ぬほど酒を飲まれた。クソ上司のへらへら顔を思い浮かべながら、明日あのハゲ頭の頭上から槍が降ってくればいいのにと呪わずにはいられない。しかし残念ながら明日の天気予報はにこにこの晴れマーク。トゲトゲの雨の槍マークが出ればいいのに。

男の一人暮らしには広すぎる一軒家へ帰宅する。金木犀のやさしい匂いが酒臭い俺を迎え入れてくれた。金木犀のような甘くてやわらかな雰囲気的女性とどこかで巡り合いたいものだ。

真っ暗な家の中、階段を上がり二階にある自室のドアを手探りで開ける。使い捨てのコンタクトレンズを外してネクタイを緩めた。そのままの格好でベッドにうつ伏せに倒れこんだ俺の耳に、届いてきたあの不思議なメロディー。隣に建っているアパートとこの二階の部屋との距離があまりにも近いため、ずっと閉めっぱなしだったほこりっぽいカーテンを開けてみる。

月明かりの下、隣のアパートのベランダに人影が揺れていた。

テーブルの上に無造作に置かれていた眼鏡をかけて、その姿を窓越しで確認する。リクルートスーツを着た女が赤いペディキュアが目立つ素足でベランダに立ち、生クリーム色のリコーダーを吹いているという不思議な光景を目にした。：最近毎晩聞こえていたメロディーの正体はこれか。気付かれないようにカラカラと窓を開けて、リコーダーの音に耳を傾ける。相変わらず、へったくそ。でも、も

うっすらとだけ聞いていたような気がしてくるから不思議だ。

「盗み聞きですか」

ピー、と高い音を鳴らしながらリクルースーツの女が俺を見据えていた。…どこかで会ったことがあるような感じはするが、多分気のせいだろう。窓から少し身を乗り出して、女の顔をじっと見つめる。女の、長い黒髪が艶やかに揺れている。

「なんか、顔色悪くないですか？病気？」

「いや、ただの飲み過ぎです」

「ここで吐かないでくださいね。せつかくの金木犀の香りが台無しになります」

「…努力はします」

「そうだ、そこで少し待っててください」

急に吐き気に襲われ、口元を片手で塞ぎながら、おもむろに部屋の中に入っていた女の言葉に首を傾げた。ベランダへ戻ってきた彼女の手にはリコーダーはなかった。

「どうぞ」

よそ見していた俺の額に何かがガツンと当たった。

「痛ってえ…」

「ナイスキャッチです」

「えっ、どこが？」

「おでこは無事ですか」

「これが無事に見える？」

「見えないかもです」

控えめに肩を揺らして笑う彼女の笑顔は辛辣な言葉を言う割に、かわいらしいものだった。

「ペットボトル？」

「ミネラルウォーターです」

「くれるの？」

「私の飲みかけで良ければ」

「ありがとう」

「目の前で吐かれるよりマシですからね」

「…ああ、そういうことか」

「そういうことです」

ピーヒョロリ。

リコーダーでまぬけな音を奏でながら、彼女は薄暗い明かりの灯った部屋の中へのらりくらりと戻っていった。…まだかすかに聞こえてくるこの曲は確か、女の子が森でくまに出会って貝殻のイヤリングを拾ってもらった童謡だったような気がする。フンフンと、無意識に口ずさんでいた自分に笑いと吐き気がこみあげた。

そんな、フシギで楽しい夜のこと。

木曜日（後書き）

リコーダーの色って、ミルクの飴みたいでおいしそうです。…お腹空いてるのかな（笑）

金曜日（前書き）

雨宿り中、ふたたび接触。

金曜日

まだ少し鼻声の俺は二日酔いの頭を抱えてしゃがみこんでいた。会社から出てすぐに、突然の大雨。もちろん天気予報のオネエサンを信じきっていた素直な俺が傘を持ち合わせているはずもないので、今は公園の休憩所にて、ずぶ濡れのまま雨宿り中である。折りたたみ傘ぐらい常備しときゃあ良かったぜ、畜生。

「女にでも振られましたか？」

頭上から聞こえてきた抑揚のない女の声。濡れた前髪を掻き上げながら顔を上げると、アニマル柄のスカーフを頭に巻き付けている（赤ずきんちゃんみたいだ）リクルートスーツの女がずぶ濡れのまま突っ立っていた。…ていうか、昨日のリコーダー女である。声をかけられたほんの一瞬、傘を持った女の子が俺に声をかけてくれたぜイエーイ！と勘違いした自分がものすごく恥ずかしくなった。

「いや、ただの雨宿り中ですけど」

「そうなんですか、つまらないです」

「…キミは俺に何を期待してたんですか」

「失恋した悲しさは雨に濡れても消えないものですからね」

「いやだから振られてないって言ってるじゃん。人の話聞いてた？」

「ジョークです」

「分かりにくいジョークをありがとうゴザイマス」

リコーダー女：お隣さんは、長い黒髪を手でギュッギューツと絞りながら俺の隣にしゃがみこんだ。ずぶ濡れの男女が公園に2人きり。あまりロマンチックなシチュエーションではないことは確かである。ここが洞窟だったらまた状況も変わってくるのかもしれない。

「私は今日も振られてしまいました」

雨音にかき消されてしまいそうなほどか細い声に、視線をお隣さんの横顔に向ける。表情のない横顔は、地面に落ちていく雨をじっと見つめたまま動かない。真っ黒なリクルートスーツは雨のせいで鎧のように重たそうに見えた。

「今、何連敗中？」

「もうすぐ自分の歳を上回ります」

「今、いくつ？」

「今年で21になります」

「若いなー」

「オニーサンもまだまだ若く見えますよ」

「俺もまだまだ若いからね」

お隣さんは静かに瞳から溢れそうな小さな雨を拭って、笑った。折りたたみ傘も、ハンカチも持っていない甲斐性ナシの俺は、鞆から買いだめしておいたロールケーキを取り出してお隣さんに渡す。彼女の、きょんとした口元がゆっくりと緩んでいくのが分かった。

「ロールケーキですか」

「…笑いすぎじゃね？」

「いえ、すいません。意外性がありすぎて…」

「でも、そっちのほうがいいよ」

「え？」

「笑ってたら、雨も止んじゃうんじゃないかなーって思ってさ」

「だいいいですけどね」

再びアニマル柄のスカーフを頭に巻き付けているまぬけな格好をした彼女を見ていたら、なんだか俺まで笑えてきた。傘の代わりなんですよ、と自慢げに話されるから余計に吹き出してしまう。

「オニーサンの分のスカーフもありますよ。巻いてあげますね」

「コレ…花柄なんですけど」

「わあ、似合う」

「もっと感情を込めて言ってくれませんか」

フアンシーな花柄のスカーフを頭に乘せられたまま苦笑いする俺の目の前に立ったお隣さんが、「お揃いですね」と笑う。雨はまだまだ止みそうにないけれど、雨宿りはそろそろお終いにしよう。花柄スカーフを乗せてゆっくりと立ち上がる。アニマル柄スカーフの彼女は俺の数歩先を歩いてから、ゆっくりと振り返る。声を出したのはほぼ同時だった。

「一緒に帰りませんか？」

雨に濡れた金木屋はしっとりとしてどこか色っぽい。そして、
雨音と共に聞こえてきたリコーダーの音色はいつもよりほんの少し
だけ穏やかだった。

明日はどうか晴れますように。

金曜日（後書き）

雨の日はあたたかいカフェオレが飲みたくなります。ごくごく。

土曜日（前書き）

土曜日、雨上がりの早朝にて。

土曜日

お隣のアパートから聞こえてきた大音量のラジオ体操の曲で目がぱっちりと覚めてしまった。寝呆け眼で時刻を確認すると、5時13分を表示している。カーテンの隙間から射し込む寝起きの太陽の光が眩しい。

眼鏡をかけて、窓を開ける。秋のつめたい朝の匂いとほのかに香る金木犀をゆっくりと吸い込もうとしたら、あくびが出た。そして、背伸びしたまま隣のベランダを見た瞬間、口がぽかんと開いてしまった。

「おはようございます」

いつものリクルートスーツを着たお隣さんがベランダでバナナを食べながらラジオ体操をしていた。素足がとても寒々しい。目が合うとバナナの皮をひらひらと揺らしながら呑気に挨拶される。

「あの」

「んー？」

「昨日は、どうもです」

彼女のポニーテールがぺこりと下がった。ベランダの物干し竿には、昨日のスカーフたちがふわふわと風に遊ばれている。：今日は、晴れてよかった。

「いや別にいいよ。ロールケーキならまだたくさん家に買い置きがあるし」

「は？」

「え？」

「：オニーサン、もしかして鈍感ですか？」

「どん…？え？」

「ちっ」

「なんで舌打ち？朝からなんで舌打ち？」

「いえ、なんでもないです。一分前の私の言動は忘れてください」

「ラジオ体操しながらバナナ食べていたこと？」

「ちげえよ」

「スイマセン」

こんな早朝から、自分より年下の女の子に泣かされそうになっている情けない男がここにひとり。ハアァ、と大きなため息をつかれてしまい更に俺のチキンハートがちくちくと痛んだ。なんで最近の女の子は口が悪い子が多いんだ。俺のタイプは、フリフリエプロンが似合う家庭的な子です！

「でも、ありがとう。昨日はオニーサンと一緒に雨宿りして雨に好きになだけ濡れることができて、少しだけ気持ちが悪くなったから」

「…そっか」

「今日も当たって砕ける覚悟で頑張ってください」

「うん、頑張れ」

彼女の手にはいつの間にかバナナではなく、リコーダーが握られて

いる。ピーヒョロ、とまぬけな音を返事代わりにしてお隣さんは勝ち気な笑顔を見せた。

「内定もらったら、オニーサンに一番にお知らせしますね」

「うん、ロールケーキ食べながら待ってるよ」

「ソの音吹いてお知らせします」

「その前に、どの音がソなのかわからないと思う」

「じゃあ、とりあえずリコーダー吹きます」

「うん。その方が分かりやすいな」

「行ってきます」

「いってらっしゃい」

気合いがこもっている背中に向かって、窓から身を乗り出してヒラヒラと手を振って見送る。たまには早起きするといったことがあるんだなあ、とびよこびよこ揺れるお隣さんのポニーテールを見つめながら思った。ポニーテールって、なんかイイよね。

「あ」

不意に、部屋に戻る前にお隣さんが振り向く。

「オニーサンって、眼鏡してる時のほうが格好いいですよね」

金木犀の甘やかな匂いと共に、彼女のやわらかな笑顔が単純な俺の

心にどきりと直撃した。

今夜はどうか、下手くそなりコーダーの音色が響いてきますように。

日曜日（前書き）

今回で、最終話です。

日曜日

貴重な休日は、気が付けば半日過ぎようとしていた。2日洗っていない小汚いスエットからラフな格好に着替えて、夕方になる外にぼんやりと出る。向かう場所は、近所のスーパー。彼女がいない一人暮らしも慣れてくると、料理の腕前がめきめきと上達してくるのがわかって、嫌気がさす。主夫の人生はできれば歩みたくないものだ。

「ねえダーリン、今日は何が食べたい？」

「ハニーが作ってくれるものならなんでも食べるさ」

「やあだ！もうっ、ダーリンたら！」

「こら、僕から逃げられると思ってるのかい」

「逃げるつもりなんてないわ。…ただ、あなたに追いかけてほしいだけよ」

「ハニー…」

「ダーリン…」

庶民的なスーパーの野菜売場にて。鳥肌全開のバカッブルの会話を早足で通りすぎ、独り身の俺は今夜の夜飯の材料をかごにやけくそ気味に放り込んでいく。お菓子などの甘いものはいくらでも食べられるが、甘い恋人同士のイチチャイチャっぷりは食べられたモンじゃない。腐りかけのミカンを食べて腹を下すほうがマシである。

ほどよく膨らんだエコバッグをぶら下げて、夕暮れの帰り道を歩く。他人の家に咲いていた金木犀の花が控えめにそうっと、俺の足元に着地した。…そういえば、昨夜は彼女が奏でる不器用な音色は聞こ

えてこなかったことを思い出す。

そのときである。前方からのししの如く一心不乱にこちらに向かつて走ってくるボサボサ髪のリクルートスーツ女を視界に捉えてしまったのは。…あれは間違いなく、お隣さんだ。

「神様のバックヤロー！」

青春くさいセリフを大声で叫びだした彼女は、そのまま俺の目の前を風のように通りすぎ、華麗にすっ転んだ。両手に提げていたビニール袋の中身が好き放題に彼女の周りを取り囲んでいる。顔面をコンクリートにびったりとくっつけたまま微動だにしないお隣さんの前にしゃがみこみ、話し掛けてみる。

「おーい、生きてますかー」

「生きる意味ってなんなんでしょう」

「それは俺も是非神様に聞きたい疑問です」

「そうですか…」

「うん」

「……」

「……」

「そ、そうだ！うん、じゃあ今から鍋でもしよう！丁度ここに鍋の材料もあるし！俺もひとり鍋は淋しいと思ってたところだし！どう？」

「……」

「生きる意味？について考えながら、鍋パーティーでもしよっかな？な！？」

どよーんとした空気から察するに、どうやら今日も振られてきた帰りらしい彼女に控えめにそうっと焦りながらも、提案してみる。ストッキングが伝線しているその膝からにじむ赤黒い血をそのままに、彼女はゆらりと起き上がった。ポニーテールは崩れ、髪の毛はグシヤグシヤ。顔も化粧が崩れてボロボロ。お隣さんは得意気な笑みをにやりと見せた。

「私、白菜切るの超上手ですよ」

「よーし、決まりな」

思わず敬礼をしたら、舌打ちされた。ひでえ。

潰れかけた肉まんたちが入った袋を片方持つ俺の腕をすぐに掴み、「ひとりで持てますから」とひよいと自分で抱え直す強がりなお隣さんの、トナリを歩く。俺もこんな風にかむしやらに生きてみたいものです。

「ていうか、この大量の肉まんひとりで食うつもりだったの？」

「余裕です。あ、ピザまんとかカレーまんもありますよ」

「なんであんまんがないんだよ!？」

「私、甘いもの苦手なんです。特に餡子とか生クリーム系…見ただけで吐き気がする…」

「え…じゃあこの間俺があげたロールケーキは…」

「おいしく頂きましたよ?でも次は辛いものを頂けると嬉しいです」

アパートの前の自販機にふらりと立ち止まった彼女は、無抵抗な自販機に向かってがつんと蹴りをいれて、ふふふと笑った。目が笑っ

ていないことに気付く。後ろからそろりと覗いてみると、コーラが売り切れだった。

「この自販機常にコーラが売り切れなんですよね」

「だからって、蹴らなくても……」

「で、なんでオニーサンは迷いなく“おしるこ”のボタンを押してるんですか」

「イライラの時には甘いものがいいたいよ。はい、あげる」

「……どうもです」

自分の家の金木犀の甘い匂いをくぐり抜けて、玄関を開ける。興味津々に家の中を覗きこむ彼女の黒髪の毛先がやわらかく揺れた。自然と視線がかち合って、お互い笑い合う。

「なんか、俺たち前にもどこかで会ったような気がしない？」

「そりゃそうですよ。こんな近所に住んでるんですから、すれ違わないことのほうがあり得ないです」

「いや、そうじゃなくてさあ、」

「いいじゃないですか。今こうやって偶然会って話してるんですから」

「そっか」

「そうです」

彼女の黒いかばんからちょこんと顔を出したりコーダーと、俺のエコバッグからひよろりと顔を出している長ネギが可笑しそうに寄り

添いながら、くすくすと笑った。

日曜日（後書き）

「ハニーアンドミルク」完結させることができました。金木犀、前を突っ走る空回り気味の女の子、生クリーム色のリコーダー、甘党男子、お鍋、あたたかい飲み物、肉まんとあんまん。私の好きなものをぎゅっと詰め込んだお話「ハニーアンドミルク」、最後までこんな拙いお話を読んで下さったあなた様の心のはじっこにでもぽわっと溶け込んでいてくれたらいいなあと思います。

ありがとうございました。

後日談（前書き）

その後のふたり。

“番外編”でございます。

後日談

頻繁に開けるようになった二階の窓から、最近焦げくさくて少し甘ったるいような不思議な匂いが冬の風といっしょに届いてくるようになった。

仕事の帰りに、お隣さんを見かけた。ひとりだけジャージ姿で、行列ができるクレープ屋さんに並んでいる彼女はかなり目立っている。周りの好奇の視線なんて気にも止めず、凜と立っている横顔は相変わらずかっこよかった。

声をかけようと思ったけど、

「バナナチョコ…生クリーム多めで」

注文する横顔が恥ずかしげに赤く染まっていたから、そっとしておくことにした。あれ？　そういうえば、甘いものは苦手だって言ってなかったっけか？　もしや、甘いものの克服中なのか？

また次の日、かわいい看板のケーキ屋でお隣さんを見かけた。今度は、ぱっちり目と目が合ってしまった。お隣さんは、気持ちのいいくらい舌打ちを俺にくれた…ひどくないですか？

「甘いもの克服キャンペーン中ですか」

「今、ものすごくキムチ食べたいです」

「矛盾してね？」

「…ちっ」

「……なあ、」

「はい？」

「それ、照れ隠し？」

「あげます」

「え」

「あげます。買った瞬間、胸焼けがしました」

話を逸らされた挙げ句、無理矢理ケーキの箱を渡された。そのまま、一直線に走り去っていく後ろ姿を呆然として見送った夕暮れの商店街。その日は、ひとりで美味しくケーキをいただきました。お隣さんも食べたら良かったのになあ。

そのまた次の日。深夜の開けっぱなしの窓から、音が外れたリコーダーの音色が聞こえてきた。寝ぼけたまま眼鏡をかけて、窓から上を覗くと前髪をでかい真っ白なりボンでちょんまげにしておでこ全開のお隣さんが立っていた。目の下にうつすらと隈が見える。

「どうも」

「…うん」

「あの、今からそっちに行っていていいですか」

「…うん」

「ありがとうございます」

「…うん。…えっ？」

状況を飲み込めないまま、玄関のチャイムが鳴った。階段を転がり落ちそうになりながらも、慌ててドアを開ける。パジャマ姿の無防備なお隣さんがひょっこりと顔を出した。…この子、天然なのか計算なのか、いまだに謎である。

「なに動揺してるんですか。また、酔ってるんですか？」

「いや、違う…けど」

「オニーサンは、甘いものが好きなんですよね」

「え？」

「好きなんですよね？」

「は、はい」

年下の女の子に妙な威圧感を覚え、ちよつとびくつく二十代半ばの俺。お隣さんは、きよろきよろと目をあちこちに移動させたあと咳払いをして、ズイッと俺の前に何かを差し出した。大きなお皿の上に、不恰好なチョコレートケーキがラップに包まれて乗せられていた。

「あげます」

「え…」

「あげます！」

「イデデデデッ！皿、俺の顔に食いこんでるから！」

ぐりぐりと皿を頬っぺたに押しつけられて、眠気がどこかにぶっ飛

んでいく。涙目になりながら受け取ると、さっさと帰ろうと回れ右をするお隣さんの腕を慌てて掴んだ。

「なんででしょう」

「いや、えっと、このケーキ…」

「私の手作りです。たぶんきっと確実にまずいと思うので一口食べたら三角コーナーに捨てて下さい」

「いやいや、捨てない捨てない！食べるよ、だってせっかくの手作りだし…」

ちよんまげされた前髪をびよこんと揺らして、お隣さんが俯いた。どうしよう、腕を離すタイミングが分からない。

「お腹壊しても責任はとれません」

「うん、大丈夫だから」

「…お礼が、したくて」

「お礼？」

「はい。この間のお鍋、とても美味しかったので…」

「見事に肉ばっか食べてたよね」

「お肉、好きなんです」

「…あー、それでケーキ作ってくれたんだ？」

「はい」

「そっか…ありがとう」

素直に口元が緩む俺とは対照的に、お隣さんはググツと口元を引き締めて「腕、いい加減離してください」とぶっきらぼうに呟いた。

さつきから目が合わないのは、多分照れているからなのだろう。ちよっと可笑しくて笑えば、ぎろりと睨まれた。

「ありがとう」

「まずかったら三角コーナーに」

「どんだけ自信ないの！？大丈夫だから！な！？」

「では、おやすみなさい」

「おやすみー」

こっそりと見えてしまったお隣さんの指先の包帯に、申し訳ないと思いつつも胸がほっこりとした。不意に思い出したのは、クレープ屋で見た照れた横顔とケーキ屋のかわいい舌打ち。玄関先でケーキと見つめ合う自分の顔がお隣さんとまったく同じなような予感があり、ひとり布団の中で悶絶した真夜中。

真っ暗な部屋、つめたくなつたベッドの上で食べたケーキの味は焦げていて苦かったのに、とっても甘ったるく感じた。

外からは、チョコレートケーキと似たにおいが届いてきてまたひとりで照れてしまった。

翌日。ばったりと会ったお隣さんに「うまかったよ」という感想といっしょに空っぽのお皿を手渡すと、照れ隠しのパンチが横っ腹に飛んできた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5872o/>

ハニーアンドミルク

2010年12月25日13時45分発行